

震災の映像(1995年3月号掲載・吉本 和弘)



9日ぶりで家の敷居を跨いだ時、体中に安堵感が沸き、わが家と家族が無事であったことを神に感謝した。無事だとは知っていたが、自分の目で見ない限り、とても信ずる気にはなれなかったからだ。

ところが、布団にもぐり込んでみるも、身も心も休んでくれなかった。瞼の裏側に震災の惨状が映像となって現れるし、寝返りをうてばあらゆる関節が音をたてて睡眠を阻止したからだ。頭も体も自分のコントロールできる状態ではなかったのだ。

『あの日は何をしたのだろうか。』

『部隊はどう動いたのだろうか。』

いくら考えても、目の前に写しだされるのは映像ばかりであった。三つの画像が繰り返し、繰り返し、映し出され、思考力は全く無力となっていた。

この日、仕事を終えて仮眠についたのは午前5時10分。待機室の布団で「ゴー」という地鳴りを遠くに聞いたと思う。続いて、消防署の建物が分解するほどの揺れに見舞われた。

揺れが終わると、非常灯が点灯し、事務所は足の踏み場もないほどに荒れはてていた。ガレージでは車止めが散乱し、ポンプ車や救急車が歩道にまで乗り出していた。歩道が浮き上がり、路面が割れていた。

『この静けさは何だ！』

人の声、犬の鳴き声、車の音。なにひとつ生活の音がしない。凍りついたような静寂が空間を包んでいた。

空は闇に包まれ、暗闇の向こうに小さいがしかし真っ赤な半円が眺められた。

「火事だ。出動に備えろ！」

今も大笹滋士長の叫び声が耳にこびりついて離れない。それはこの後の不幸の連続の始まりであつたからだ。

普段なら 20 数台の消防車を取り囲んでいるはずの火災が目の前にある。

「だめだ！消火栓に水がない！」

応援を求める無線に応答はない。目の前の倒壊家屋の下から人の声がし、その家屋に火が迫ってくる。

「プールから水を取れ！」

病院に火が迫っている。

「病院へ行って来る！」

「皆さん！早く避難してください。動けない人はいませんか。避難先は湊川中学です」

たくさんの無残な倒壊建物があり、至る所で人だかりがしている。

「消防さん。お父さんとお母さんを助けて！」

上沢・松本地区の火災に出動できたのはポンプ車 2 台に消防隊員 7 名であった。

非常招集の部隊がこの地区の火災に投入されたが、ポンプ車 2 台という戦力不足は解消されなかった。

倒壊家屋は木と布と紙の固まりであった。倒壊しなかった建物もモルタルがはげ落ち、木ずりが剥き出しで、破れた窓からはカーテンが揺れていた。

火災は火面を拡大するだけではなかった。ようやく火面を包囲する放水体制を組めたと思う瞬間、放水隊の後ろから火の手があがる。延焼阻止線を突破した火災は先に消火しなければならない。これに掛かっている間に包囲していた火災が勢いを増し、ホースを焼き切ってしまう。

火勢が北面に延焼しだすとこれより先の住民に避難を呼びかけ、東面に延焼しだすとこの住民にも避難を呼びかける。消防力が火勢に負けている以上、風向きに振り回された。

「燃料が切れてきた。補給願う」

「転戦のためのホースが不足。調達して欲しい」

「これより食料の配付にまわる」

夕刻。状況調査のために登った会下山の上から、恐ろしい光景を見せつけられた。

火勢は東風に乗って西面への圧力を増し松本 4 丁目から 5 丁目に移ろうとしていた。

恐ろしい光景とは、西面に延びようとする火面よりさらに西に 3 つの小さな炎が立ち上がっていたことである。続いて、ゆっくりと大きな火面に飲み込まれていった。

『どこで、火面を捕まえればいいのかろう』

身震いした。

ポンプ車は1分間に2トンの水を放水できる。この水を確保するには川から取水するほかなく、取水できる場所は火面の東側に偏っていたからだ。

「神港高校の南北道路でこの火災と決着をつける。同時に神港高校に避難している人を守れ」

中村和敏署長の檄が飛んだ。

熊田晃久救急主査が作戦を担当すべく、会下山の北東、東山小学校へ駆けた。

ここにポンプ車を据え、会下山を迂回するようにホースラインを延長して火面の西側に部署、火災と最後の対決をするのである。1本20メートルのホースを50本、しかもこれを4線確保しなければならぬ。全て人海戦術である。担当した消防職員・消防団員は必死であった。

「西側の兵庫高校に避難しようという意見が強く、お年寄りを多数抱えている私どもは判断に困っています」

神港高校の職員から避難者へのアドバイスを求められる。

この狭い南北道路に避難者と避難の車で溢れることは、作戦の失敗を意味していた。

なぜなら、作戦の成否は1.火災が到着する前に作戦を完了すること2.消火活動をしている際に飛び火がないこと3.神港高校の南北道路が消防隊の自由に使えることにかかっていたからだ。

神港高校の体育館の中は真っ暗で、隣の人顔すら全く見えなかった。しかし、人のざわめきから避難者でぎっしり埋まっていることを知った。

「兵庫消防署です」

かすれ声だが、大きな声が出た。懐中電灯が正面に向けられ、少しでも入口に立っている人の顔

を見ようという意図が知れた。

「眠れぬ夜をお過ごしでしょうが・・・」から「神港高校を死守いたします」まで一気にしゃべった。

「消防さん。がんばってね」

「頼むぞ。消防さん」

励ましの言葉と拍手を背にして高校を後にした。

ホースが延長されてきた。水圧も徐々に上がってきた。火災はまだ少し先にあり、飛び火もなさそうだ。

香川県・和歌山県・大阪府のポンプ車が応援に駆けつけてくれた。

18日0時。ようやく火勢と消防力が均衡する。延焼をくい止めるとその余勢で火災を鎮圧させた。

3時であった。